ある唯物論

羨望が飛び去った瞬間
全ゆるものが無意味となり下がり
僕は死体となり
凪の海を
油のような海を「移動」することとなったのだ

次第に薄れてゆく意識の中で
僕は創造を試みようとした
世界に存在しないものを・・・
それは抵抗と呼ぶには余りにか弱いものだった
それを拒む者さえ居ないという、正にその故に

世界は風もないのに漂っていた
それは原理の存在を不要としていた
まして僕の生命は、事実としての「存在」でしかなかったのだ
僕はその為に生命を棄てたのだが
それでも世界はなお漂っていた

それは今でも不可解なことに思われたので
創造の試みは常に原理へと———
その存在を不要とする原理へと向けられた
たとえそれが樹立せられたとしても
作用の対象などある筈もないというのに

平板な青い天井を享けながら
僕は薄々感じ始めていた
絶対的な諦めの中にも
そして生命の死の果てにもなお
無表情な世界は漂ってゆくものなのだ、と

(1991.9.17)